



ソラマメ

やさいの里営農センター
営農指導員 中村 克己

農業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary



水稻

営農部 営農振興課
営農指導員 石井 枝里奈

平成30年産の振り返り

昨年は、生育期間全体を通して高温となり、その影響で、特に「シヒカリ」において、例年に比べて網下米が増加したため減収し、九十九里地域の作況指数は98(やや不良)になりました。また、乳白粒などの白未熟粒の発生も多く、品質の低下をもたらしました。高温に負けない米を作るため、本年は次の4点に注意しましょう。

高温対策① 中干しで過繁茂防止！

近年は田植え後の気温が高く、生育前半から過繁茂(莖数が過剰)になる傾向があります。過繁茂になると穂数やもみ数が多くなり、1もみ当たりの養分が減って、網下米の増加につながります。過剰な分けつを抑制するため、しっかりと中干しを行いましょう。

高温対策② 出穂前後の葉色をよく確認！

前述のように、生育前半に過繁茂になると、出穂前後の葉色が淡くなりやすくなります。その結果、光合成によるデンプンの合成が停滞し、網下米や白未熟粒が増加します。一発肥料を使っている場合でも、出穂前の葉色が淡ければ、穂肥を施用しましょう。

今後の管理

トンネル換気

ソラマメは本葉5枚以上になると耐寒性・耐暑性ともに弱くなります。特に、低温期に開花する低段の花を守るため、トンネル被覆と換気は重要です(生育適温16~20℃)。

トンネル被覆直後は、株間50cmの間に換気穴(直径5~7cm)を2つ開けておきます。2月中・下旬から換気穴を増やしていき、3月中・下旬を目安に四方換気になるよう、徐々に換気量を増やしましょう。

整枝と土入れ

採光性を高め、3粒莢を多くするため、3月上・中旬ごろから整枝を行います。節間の詰まった太い側枝を1株当たり6~8本残します。主枝と芯止まりの側枝は、株元から除去します。草勢が弱く、側枝の少ない株は放任します。

整枝後、株の中央部に置土をすることで、採光性の向上と新たな側枝の発生を防ぐことができます。

近年は放任栽培も増えていますが、3粒莢を増やすために管理を行うことで、収穫の労力軽減や、収量増加に

高温対策③ 出穂後25日までは落水しない！

登熟期間中の水分不足は、もみへのデンプンの蓄積を停滞させ、網下米や白未熟粒の増加につながります。出穂後14日は「湛水管理」、出穂後25日までは「間断かんがい」を心掛け、早期の落水は避けましょう。

高温対策④ 稲わらのすき込みは早く！

稲わらのすき込みが遅いと分解も遅くなり、田植え後の還元害や過繁茂を招いてしまいます。秋の早い時期にすき込み、十分な分解期間を確保しましょう。

ばか苗病に注意

近年、育苗期における「ばか苗病」の発生が見られます(写真①)。ばか苗病は種子消毒により防除できますが、防除が不十分な場合、育苗期だけではなく本田移植後も発生が目立ちます(写真②、③)。さらには、その胞子が飛散することで、翌年の種子になるもみにも感染してしまいます。ばか苗病を発生させないために、種子消毒を徹底しましょう。

種子消毒には化学合成農薬(ヘルシードTフロアブルなど)の使用がおすすめです。ちばエコ栽培などの場合

つながります。

追肥

追肥は、窒素・加里主体の高度化成5842を2~3回に分けて行います。1回当たりの施肥量は20gを目安とし、畝の肩または通路へ施用してください。

◆1回目(3月上・中旬)

花の生育促進・葉の確保のため、整枝直後に行います。

◆2回目(4月上旬)

安定した受精と欠粒防止のため、トンネル除去直後に行います。

◆3回目(4月下旬)

【生育状況によって施用】
莢の肥大を助けるため、莢が小指サイズの時期に行います。

病害虫防除

トンネル内の温度が上昇すると、アブラムシの活動が活発になります。アブラムシはウイルス病を媒介するほか、生育不良や莢の肥大不良の原因にもなります。発生初期の薬剤防除(表①)に加えて、側枝の摘芯も行いましょう(最下着莢位置から11節程度で摘芯する)。

は、温湯消毒だけでなく、微生物農薬(エコホープDJなど)による消毒も組み合わせたいでしょう。



写真① 育苗期におけるばか苗病



写真② 罹病株の出穂



写真③ 株元の胞子

表① ソラマメのアブラムシに登録のある薬剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数
アディオソ乳剤	3000倍	収穫7日前まで	3回以内
アドマイヤーフロアブル	4000倍	収穫7日前まで	3回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4000倍	収穫7日前まで	3回以内

12月の分析経過について

合計2点	
多成分一斉分析	ニンジン 1点 (ちばエコ)
残留農薬分析点数	イチゴ 1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数 合計45点